追悼

帰化植物に魅せられて

植物学者 淺井康宏先生（昭和33年卒）のご紹介

渡邊宇一
昭和63年卒

淺井康宏名誉教授におかれては，令和４年８月17日，89歳で逝去された。

淺井先生は歯科医学の学者である一方，帰化植物の調査・研究に生涯を捧げられた植物学者でもあった。先生は一昨年（2020年），これまでのご研究の集大成として「エイリアン植物記」という本を上梓された。また昨年（2021年），NHKのラジオ深夜便「心に花を咲かせて ー帰化植物を探求して75年ー」に出演された。これを機に門下の私は，同窓会会報で植物学者としての淺井先生を是非ご紹介したいと思いご相談申し上げたところ，大変乗り気になられ，「こういう変わった男がいたというのを，ちょっとくすぐったい感じで紹介してくれ」と仰っていただいた。内容について検討を重ねていたなかでの突然の訃報であった。

淺井先生の葬儀の際，祭壇の一隅にマツヨイグサが飾られていた。この植物は淺井先生が愛着を持って半世紀以上も調査研究を続けてこられた南米原産の帰化植物である。夏の宵に黄色い花を咲かせ，竹久夢二の「宵待草」のモチーフにもなった。しかし一般的にはいわば雑草であり，当然市場に流通する観賞用・慶弔用の植物ではない。祭壇のマツヨイグサは淺井先生の植物のお仲間が急遽採集してきて供えられたとのことだった。お別れの際，棺のなかの淺井先生に奥様が「これは主人が大好きだったから」と，このマツヨイグサをお顔の脇に添えられた。

余人にとってはつまらぬ雑草だが，お気に入りだったマツヨイグサとともに旅立たれたことは，まさに植物学者淺井康宏の面目躍如たるところを見た思いであった。

以下は生前準備していた淺井先生のご紹介文で，亡くなる数日前にご校閲いただいたものである。広報委員会のご厚意で追悼の意を込め，予定通り掲載させていただくことになった。

本稿をご霊前に捧げ，永年お世話になったお礼を申し上げるとともに，先生のご冥福を心よりお祈りする。

❷セイタカアワダチソウと記念撮影

母校名誉教授淺井康宏先生は，一昨年，「エイリアン植物記 －帰化植物の素顔と来歴－」という本を執筆された。

歯科大学の名誉教授が歯科の専門書でなく，なぜ植物の本を？と疑問を持たれる方も多いと思うが，実は淺井先生は歯科界でのご活躍はもとより，知る人ぞ知る植物学者でもある。特に帰化植物の権威として横浜国立大学で20余年に亘って教壇に立たれ，歯科医学と植物学の二足の草鞋を履くアカデミシャンである。現在は日本植物友の会の名誉会長も務めておられる。

淺井先生は平成後半から令和の卒業生には印象が薄いかもしれないが，現役時には歯内療法学講座（旧歯科保存学第一講座）の主任教授や副学長などの要職を歴任された。現在私たちが日々臨床で用いるネオクリーナーやカルビタール，クレオドン，FGなど，多くの歯内療法用薬剤をプロデュースした先生，と紹介した方がわかりやすいかもしれない。

淺井先生の歯科での業績はここでは割愛し，本稿では淺井先生の植物学者としての一面をご披露したいと思う。

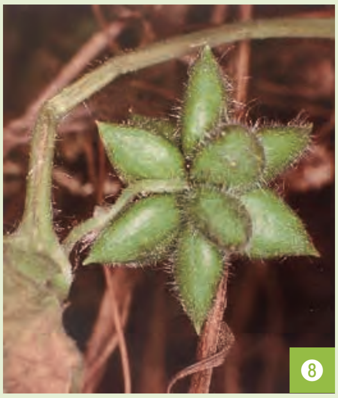
淺井先生が植物に興味を持たれたのは中学生の頃で，生物に堪能な先生に乗せられて，特に身近にある野草が好きになったそうだ。

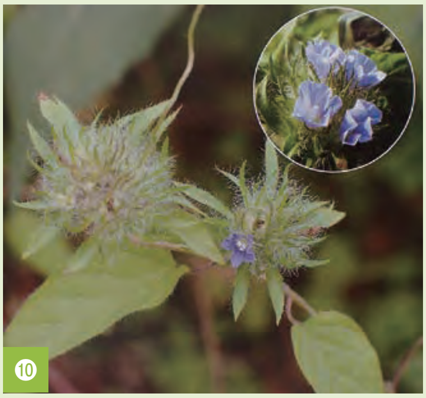
高校生の時，見覚えのない野草を見つけた。いくら植物図鑑を探しても載っていない。そこで，「これはもしかしたら日本のものではないのではないか？」と疑問を持ち，勇気を出して牧野富太郎先生の門下で当時日本の帰化植物のオーソリティといわれた久内清孝先生に問い合わせの手紙をしたためた。

そうしたら打てば響くように「その通りだ。これは北アメリカから入ったもので，日本ではあなたが最初に見つけたものだ」と返事が来た。喜びは続き，淺井先生が仮に名付けた「マメアサガオ」という名前を久内先生が気に入り，とうとう植物の学会誌に正式和名として掲載されるに至った。この快挙に当時高校生の淺井先生が舞い上がらないはずはない。この出来事はその後帰化植物の世界にのめり込んでいく大きな原動力になった。

第二次世界大戦直後は，主として北アメリカから大量の穀物等の援助物資に紛れて多くの植物が日本に入って来て，久内先生だけで

❸万巻の蔵書に囲まれて至福のひととき
❹ご自宅の移動式書架には古今東西の植物の専門書がいっぱい





⑤オトメフウロウソウ　乙女のような可憐な印象に因んで命名　⑥オニハマダイコン　着実に分布をひろげている多肉な海岸植物　⑦セイヨウトゲアザミ　欧米では強害草の代表格として厄介視される　⑧トゲナシアレチウリ　第二次世界大戦後に侵入した強害草の代表格　⑨ユメノシマカヤツリグサ　港から上陸，分布はまだ東京湾周辺が中心　⑩オキナアサガオ　和名は「翁朝顔」の意味で特異な花容から命名

「エイリアン植物記」から引用。解説は淺井先生ご自身による。

はとても観察や研究が追いつかなくなってきた。そこで久内先生は研究熱心な淺井先生を見込んで，「おまえ調べろ，そして発表もしろ。日本に入った以上名前がいるから名前も考えろ」ということになり，自然とそれらの仕事を任せられるようになったのだそうだ。

これまでに淺井先生が調査研究して名付け親となった帰化植物は，アメリカネナシカズラ，オトメフウロソウ，オニハマダイコン，セイヨウトゲアザミ，トゲナシアレチウリなど100種類を超えた。

淺井先生が名前を付けるときの考え方は，誰にでもわかりやすく親しみ深いもの，そして生まれ故郷等を織り交ぜてつけるのだそうだ。つまりアメリカ〇〇，セイヨウ〇〇，マメ，オトメ，等々，先生の優しさと工夫が伺えるものばかりである。

淺井先生には本業（歯科）があるので，普段休みが多く取れるわけではない。そんな中，植物探索で最もよく通われたのは東京都江東区の夢の島だった。ここは埋め立て地で帰化植物が入る条件としては最高だ。港があり世界中から船が入って荷物の積み下ろしがある。先住の植物もない。土壌はゴミなので肥料分は豊富。遮るものがないので日照時間は申し分ない。したがって夢の島に生える植物は一時100％近くが帰化植物だったそうだ。ここで発見，名付けられたものにはユメノシマカヤツリグサなどがある。淺井先生にとって帰化植物が生い茂るこの埋立地はまさに「夢の島」だったに違いない。

先生は帰化植物の研究に熱中していたが，いうまでもなく決して本業を疎かにしていたわけではない。

助教授時代のある日，植物の番組で朝のNHKラジオに出演した

⑪ご自宅の庭で寛ぐ

⑫海岸植物を観察する

あと，多少のうしろめたさを感じて水道橋の校舎に入ると，玄関で最も顔を合わせたくなかった保存の上司，杉山不二学長と関根永滋病院長にばったり会ってしまった。此処で会ったが百年目，さてはお小言を喰うかなと思っていたところ，両先生から，「今朝はご苦労さまでしたな」と却ってねぎらいの言葉をかけられ，恐縮したというエピソードも伺った。

人は普段が肝腎，とはまさにこのことである。

淺井先生の帰化植物の研究はアマチュアの域を遥に超えるもので，平成時代には宮中へ参上し，天皇皇后両陛下（現上皇上皇后両陛下）を始め皇族方に帰化植物のご進講をされた。その折り皇后（美智子上皇后）陛下から，「あなたのご専門は歯科医学のようですが，なぜ植物の研究をされているのですか。なにかご関係がおありですか？」とご下問あらせられた。その際，淺井先生は動じることなく「歯と葉でございます」とお答えしたところ，秋篠宮殿下が，「（は）と（は）ですか…，面白いですね」と微笑まれたと伺った。どうやら皇族方で洒落が通じたのは秋篠宮殿下だけであったようだ。

淺井先生といえば普段からダジャレの名手でもあるが，皇族方にも臆することなくダジャレを発して場を和ませるところは，まさに淺井先生のお人柄を象徴する逸話である。このお話を伺った際，両陛下の御前で話されたことを自慢げにされるご様子は全く無く，むしろ秋篠宮殿下にダジャレが受けたことを一大成果のように嬉しそうに話されていたが，この姿こそ淺井先生の真骨頂だ。

淺井先生は帰化植物に対して，外来のものだからといって決して目の敵にすることはなく，常に寛容の姿勢で接しているように思う。「日本に来た植物は，もともとすでに地球上のどこかで発見されて立派に学名が付いている。つまり新種ではない。それが日本に来たからといってどうということはないが，やはり縁あって日本に定着したものには名前を付けてあげなくちゃね」と淺井先生はよく語られる。見知らぬ植物を発見して，何年もかけて世界中の文献を渉猟してようやく身元調べができて，原産地がわかった時の嬉しさはマニアにしかわからない醍醐味だそうである。「この謎解きの苦労が楽しくまた快感となり，ここがアマチュアのいいところだ」というお話しも伺った。

最近の淺井先生は外出をあまりなさらなくなったが，「身近にある野草を人生のよき相棒とし，一つのことに打ち込めたということは非常に幸せである」と，今日も楽しそうに語っておられる。

淺井康宏先生の主な著作のご紹介

エイリアン植物記
— 帰化植物の素顔と来歴 —
（ウッズプレス 2020年１月刊）
現代帰化植物研究の重鎮が語る軽妙洒脱な保存版「帰化植物エッセイ」　（本書の惹句より）

緑の侵入者たち
— 帰化植物のはなし —
（朝日選書474 朝日新聞社 1993年５月刊）